



障害を持つ幼児の保育(28)

—この子と出会ったとき—

津守 真 (M)

津守 房江 (F)

自分の居場所を探す

こんなに高いところを自分の居場所とするのは

F 先月号で私たちは子どもが高いところに憧れをもっていることを話し合いました。養護学校の子どものうちの中には自分の好きな居場所がとも高いところで、大人がはらはらすることがありますね。

M 始めは高いところへの憧れであつても、やがてひとりで高いところから下を観察しているのかもしれないね。本気で自分に心をかけてくれる人が分かるのです。

F この子たちは大人が自分をこのままで受けてくれるかどうか、もっと違う自分を期待しているので

はないかと敏感に感じているのでしょうか。

M 以前、高いところに登るのが好きなYくんが塀の上に登って降りてこないとき、私はいろいろ試みた後、「きみは言葉は話さないけれど立派な男の子だよ」と言ったら塀の上から私の肩の上ですつと降りて来たのです。それから、私とその子は特別に親しくなりました。

F 高いところに登って降りてこない子どもも、大人が見方を変える子どもの気持ちが変わって、塀の上から降りてくるのですね。

M 子どもの行動を関係の表現と考えて、自分の思いや考え方を変えることは、結果的に子どもを変えることになるのです。

『居場所』について

考えさせられた子どものこと

M この夏の研究会（和歌山表現保育の会・会長武田彰子先生）で語られた幼稚園の年少組の三歳の男の子

も自分の存在の場が育っていない子のように思いました。

座布団を持って登園し、家に帰るときには毎日持って帰らずにはいられない。園で遊んでいるときも持っていました。

F 好きな縫いぐるみとかタオルを持つてくる子はしばしば見られますからそれと同じで、珍しい出来事ではないかもしれませんが、誰もが心を打たれたのはあの子の表情でしょう。

M そう、そして表情の変化です。

私はあのビデオを家で研究会の前に見ましたが、その子についてのコメントはいっさい読みませんでした。でも、あのように表情が変化するにはきっとこの



子のことをしつかり受けとめる保育者がいたからだろうと思いました。

F 実は私はコメントを読んでいます。ですからあの男の子が三歳児の中でも三月末の生まれで幼いこと、下に赤ちゃんが生まれたこと、家ではビデオを繰り返し見ていることなどが分かっています。それでもあの呆然としたような表情は存在感のない状態の子どもではないかと思えました。座布団を持つていることもその証拠と思えました。

保育者は子どもが存在感を持つことに

どのようにかわれるか

F あの研究会のビデオは三歳の二学期になってからのもですが、入園したころほとんど一学期間泣きとうしたということが話されました。担任の先生が抱っこをしていたからビデオを撮る余裕もなかったでしょう。そんな間もお母さんの縫った座布団を手放さなかったと言います。どうなるか先が分からないまま持

ちこたえるのは大変なことです。大声で泣く子を先生が抱いてどうしていいか分からないような様子でいると、周囲の先生たちはもつと違うやり方があるのじやないかと考えたり、この子は自閉症ではないかなど、みんなの中に心配や憶測が出てくるのが普通かと思うのです。

M 目線が合わないことや、他の人と関係なくビデオのヒーローのまねをして独り言をブツブツ言っていることなどから、自閉症と考えられることもあったでしょうが、ビデオを見て私はそうは思いませんでした。入園後の一学期その子が自分の違和感や不安感を、それだけ泣くという行為で表現できることに気が付くと、始めは重要視していなかったが、泣くことと抱かれることがとても大切なことに感じられました。

年少組の三学期の始まる日、長い時間かかって椅子に座布団をつけていましたね。椅子を動かして何とか座布団のゴムが椅子の背に引っ掛かるようにと、本当に苦心していました。そのことをやり終えることと、

自分の居場所をきめて自分の心のありかをしつかりつなぎとめることが重なったように見えましたよ。

F それからです、担任の先生と上着のボタンをとめるとかとめないとかでふざけっこをしたり、友達に誘われてやつと手をつなぐことも出てきました。

M 私は初め、担任がビデオを撮るのはどうかと思いました、ビデオを向けられているのを、この子が嬉しく思っていて、友達とのふざけっこが始まったことが分かりました。

F そうですね、このビデオはそういう効果がありましたね。

心の拠り所としての居場所

M 『居場所』というのは単なる物理的空間とは違いますよ。人が生きる空間です。守られて安心できる空間、一人でいることも人と交わることもできる。自分から出て行ってまた戻ることができる場所です。

そこにいる人を信頼できるとき、自分の存在が確かにされるのです。その中で子どもは成長することができるとは思います。

F ああなるほど、成長することは新しい自分自身になることも言えますから、心の拠り所がなければ不安が大きくて、いつまでも赤ちゃんでいたくなりますね。

私はバシユラールのいう『幸福な空間』という言葉や考え方が好きなんです。

その感覚を家庭でも、幼稚園や保育所でもつくりだすことができたらと思ってきました。守られた安心感と、ここではありのままの自分を出していただける。ありのままの自分は変化することも出来るのですね。

M 研究会のための冊子には担任の先生たちだけでなく、園長先生初めいろいろな先生がこの子とのかかわりを書いていきますね。園の中ではどこへいっても温かな目を感じながら動けることは子どもたちと先生たち

にとつて素敵なことですね。

F 今年の六月になって年長組になったこの子が、先生とやまももの木を見にいつて、実を取って食べた。友達にもはさみで切つて分けてあげたり、その途中でアジサイの花についておしゃべりしたりしているのが何とも言えなく自然で好ましい場面だと思ひました。そんなことができる庭先があることが、幼い子どもの生きる場所として最もふさわしいと思うのです。

M そのことは障碍を持つ子どもについても同じですね。広い校庭だけでなく、自然をたのしむ庭先があることが存在感を養う場となるでしょう。

子どもの危機への大人たちのまなざし

M いつも言っているように、そこが自分の場所であるという存在の確かさは人間成長の基盤です。守られた内側の空間があること、日常いっしょに生活する人が自分を信頼してくれていることが、子どもの存在の

確かさを作ります。それがなくなるとき雲の中を歩くように心の拠り所がなくなつて存在の危機になります。

F 子どもが家庭の中で存在の危機になるのは、引越などでも自分の生活の場が失われたように感じられたときと、下に赤ちゃんが生まれたときだと思ひます。自分のものだと思つていた母親の膝を赤ちゃんに取られることは昔からあることです。そのことが現代では子どもの存在感の危機を招くのは、上の子を大人たちが慰め、豊かな自然に気持ちを向けたりすることよりも、ビデオなどを見せて子育てを楽にしようとする考えがあるからのように思ひます。

M それぞれの家庭も人生のステップで困難がありますから、現代の家庭だけにそれを負わせることは出来ません。幼稚園や保育園の細やかな保育の中の支えがどんなに大切かを考えさせられました。